

# キャリア支援科目におけるアクティブラーニングの実践報告 —課題設定を通じたコンテキスト可視化の試み—

石田千晃

お茶の水女子大学 教育開発センター

## Report of active learning in the career support program; Endeavor to visualize a context through dialogue and discussion on agenda-settings

Chiaki ISHIDA

Ochanomizu University, Center for Research and Development of Education

This paper aims to report the achievements and challenges of the lecture titled, “Information Communication Technology and Creativity,” which was presented as a part of the career support program at Ochanomizu University. In this paper, the author described the way to develop the new types of activities with various information communication technology tools, such as iPad, Interactive Whiteboard and Content Management System. In this lecture, the students were required to determine the theme by their own. To set up the theme, the students try to visualize and express their own thoughts regarding the common issues of Japanese society with above IT tools. This study describes the processes of these students working with their counterparts from different faculties and departments.

**keywords :** active learning, career education, agenda-setting type of lectures, ICT tools

### 問題意識

本報告は、2011年より開始したキャリアデザインプログラム基幹科目「情報コミュニケーション技術と創発性」に関するものである。実施初年度に簡易な報告を行ったが（石田，2012）、その後3年の間に様々なパイロット的な実践を重ね、一定の成果と課題が浮き彫りになってきたため、改めて報告を行いたい。まず本論に入る前に、本授業の位置づけと筆者の基本的な問題意識を以下に記す。

本授業は、お茶の水女子大学のキャリアデザインプログラム基幹科目の1つである。キャリアデザインプログラムの授業は、DeSeCoのキー・コンピテンシーをベースに「双方向的活動」、「自律的活動」、「協働的活動」の3軸の中にそれぞれ位置づけられており、本学ではこれらを女性リーダーのためのコンピテンシー開発と位置づけプログラムを実施している。松下によれば「多くの能力リストが、コンピテンシー・マネジメント論のコンピテンシーの延長上にある（つまり、個人の内的な属性として捉えられている）のに対し、〈DeSeCoの〉キー・コンピテンシーは、個

人の内的な属性と文脈との「相互作用」の産物（松下，2010：〈〉内は筆者が加筆）」であり、「道具を介して対象世界と対話し、異質な他者と関わりあい、自分をより大きな時空間の中に定位しながら人生の物語を編む能力（松下，2010）」の涵養が目指されている。

筆者が担当する授業「情報コミュニケーション技術と創発性」は、3軸の中でも、「双方向的活動」を通じて「言語・図表の活用力」、「知識・情報の活用力」、「テクノロジーの活用力」を体得することに焦点が当たっており、全13のキャリアデザインプログラム基幹科目における基礎科目として位置づけられている（Figure1）。すなわち、本授業で培った基礎力や問題意識を基に、その他のキャリアデザインプログラム基幹科目内の発展型科目（「キャリアプランニング実習」や「グループワークとマネジメント」等）へと移行することが推奨されている。

「情報コミュニケーション技術と創発性」では、これらのキー・コンピテンシーを涵養するアプローチとして、アクティブ・ラーニングの手法を用いている。アクティブ・ラーニングとは、「教員による一方的な講義形式の授業とは異なり、学習者の能動的な学習

基幹科目群

分野	単位数	プログラムで育成する就業力を方向づける
お茶の水女子大学論	2	プログラムで育成する就業力を方向づける
女性リーダーへの道(入門編)	2	言語・発表の活用能力
知能環境論	2	双方向的活動 知識・情報の活用能力
情報コミュニケーション技術と新発性	2	テクノロジーの活用能力
女性リーダーへの道(実践入門編)	2	大規模な行動力
キャリアプランとライフプランⅠ	2	計画・実行力
キャリアプランとライフプランⅡ	2	計画・実行力
働く女性の権利と地位	2	権利・責任の表明力
共生社会で働く	2	人間関係の構築力
グループワークとマネジメント	2	チームでの協働力
女性リーダーへの道(ロールモデル入門編)	2	対立の調整力
インターシップ	1	知識や技能を適切に組み合わせ、実践する
キャリアプランニング実習	1	知識や技能を適切に組み合わせ、実践する

Figure 1: お茶の水女子大学キャリア支援基幹科目と各授業の位置づけ

への参加を取り入れた教授・学習法の総称(文部科学省HP, 2015年3月16日閲覧)」で、「発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法(文部科学省HP, 同上)」として含まれている。以上のようなことから端的に言えば、本授業は大学におけるキャリア教育科目内で行われているアクティブ・ラーニング型の授業と位置づけることができる。

しかし、アクティブ・ラーニングに関してもキャリア教育に関しても、比較的新しい取り組みである一方で、世の潮流にのって「とにかくやらなければならない」という論調が先立ち、その意味や意義が十分検証されないまま、導入・運営されている側面もあるようだ。例えば、溝上はアクティブ・ラーニングが孕む問題を次のように指摘する。

「ディスカッションではその場で思いつくことだけで議論がなされており、批判的な検討もなく、内容の深まりが見られない。内容が深まるような教員の介入も十分でない。プレゼンテーションの様子を見ても、ちょっとインターネットで調べて集められる情報をパワーポイントのスライド上に並べ、見た目には元気に発表しているけれども、内容を見れば、たいした吟味や検討を重ねた跡もなく、表面的なものとなっている。(溝上, 2014)」

また、キャリア教育に関しては、「望ましい「勤労観・職業観」や「汎用的・基礎的能力」の方向性は掲げながらも、それを実現する手段を具体的に提供することなく進路に関する責任を若者に投げ出すことに終始している(本田, 2009)」という本田の指摘も看過できない。筆者は、これらの指摘や批判を自戒的にひきとり、本田の「仕事の世界に参入する準備としての教育」

にまつわる議論を準拠点とし、アクティブ・ラーニング型授業の構成ならびに実践を行ってきた。

本田が言う「仕事の世界に参入する準備としての教育」には2つの側面がある。それは、若者が仕事の世界に入る前に「働かせる側の圧倒的に大きな力、しばしば理不尽なまでの要求を突きつけてくる力に対して、働く側がただ翻弄されるのではなく法律や交渉などの適切な手段を通じて〈抵抗〉するための手段」を身につける側面と「働く側が仕事の世界からの要請に〈適応〉するための手段(同上)」を身につける側面である。特に筆者は本田が言う〈抵抗〉としての準備に着目した。なぜならば、〈抵抗〉は自分と周囲の環境との関係を見直しそれらを再構成するためには必須となるからである。しかし、本田が言う〈抵抗〉としての学習事例として出されているのは「仕事の世界」における「法律や交渉を学ぶこと」であり、これらは何か個人にとって問題や事件が起こってしまった後 — もしくは起こりそうな局面 — に打って出る手段や準備というニュアンスが強く、日常のレベルで遂行されるものを指してはいないように思われる。勿論それらも重要であるが、明らかに表面化した「問題」や「事件」に対する〈抵抗〉ではなく、ともすれば日常淡々と遂行されゆく業務のレベルで、個人が自らに課された仕事の意味を吟味したり、自分の役割を社会的な文脈の中で意識したりするような実践をもう1つの「〈抵抗〉する手段を身につける準備(同上)」として位置づけることはできないだろうか。というのも、一見問題が無さそうに見える日々の業務をその社会的な意味を考えずにただ遂行することにこそ、仕事に関わる個人や組織が内包する構造的な問題をむしろ強化する側面があると考えられるからである。

筆者は、これまでに雲をつかむような思いで「社会人」として必要とされる能力を身につけようとしている学生に数多く接してきた。彼らの多くは「社会人」になる前に、産業界から提示される「〇〇力をつけなければならない」というプレッシャーを日々感じつつも、それらの「〇〇力」が何なのかが漠然としており、具体的に学生の間は何を努力してよいか把握できていない。この状態が転じ、メタな枠組み(例えば卓越性の軸を作っている側の論理)に対する理解や批判的な検証抜きに、時間や労力を費やす状況を生んでいる。上記のような行動パターンが常態化すれば、大学を卒業した後も、社会の仕組みや状況を作り出す側が提供する論理を深く考えずに受け入れるだけになってしまうのではないだろうか。そうだとすれば、それは

今後の人生において、常に社会の仕組みや状況を作り出す側の都合に翻弄されることを意味している。

これは、バーンステインの議論を引き合いに出すと「ある意味の秩序が文脈に縛られ、外と繋がる力を持たない（バーンステイン，2000）」状態であると言えよう。バーンステインは、「意味がそれに特有の物質的基礎に対して間接的な関係を持つ（同上）」こと、すなわち、「空間」が存在することが、「物質的なものと非物質的なものとの間の関係を変化させ、オルタナティブな関係実現にむけての可能性への舞台になり得る（同上）」と言うが、この「空間」を作り出すことを「社会的コンテキストの可視化プロセス」として意識しながら、キャリア教育内における「仕事の世界に参入する準備としての教育」を実体化できないだろうか。筆者は、上記のような問題意識に沿って授業実践を積み重ねてきた。その授業内容の詳細を次項より説明していきたい。

#### 授業概要

シラバスには本授業の主題を次の様に記載している。

「本授業の目的は、現代社会における様々な課題に対して、具体的な解決策を模索し、表現していくことにあります。そのため、メインの活動は、企画書作りになります。企画書作りの過程で、1. ICT を利用した情報収集と共有の方法、2. ディスカッションによる動的な情報の生成について学んでいきます。授業は、グループワークを中心に、情報収集、ブレインストーミング等の活動を行います。これらの活動を通じてオフラインとオンラインの知の活動が有機的に繋がるような技法を体得してもらいます。」（2014年度シラバス抜粋）

上記のように授業では、様々なICTツールを駆使し企画提案書を作成することを最終ゴールとしている。授業は、学部生向けのもので、学部学科は問わず誰でも受講することができる。授業内では、学生各々が所属する専門分野のディシプリンからは一旦自由になって、他者との対話を通じて課題を設定する活動を中心にすえている。

初年度は、企画テーマを設定する際に、新卒採用選考の1ステップである「グループディスカッション」のテーマを参考にしたが、次年度からは、まずは個々

人が純粋に関心がある現代社会における問題や課題を出してもらい、その中からグループのテーマを絞っていくようにした。その際には、すぐに多数決で誰か1人のアイデアに決めるのではなく、互いに相乗りできそうな部分や、議論の俎上に載せたほうがよい点を教員が一旦整理し、学生に提示後、一定期間の対話と議論を経て決定している。半期ある授業期間中、企画テーマを決めるところまでに授業回数の大部分を使い、企画を実現させる計画部分に関しては、授業の後半2-3回程度で行う簡易な設計になっている。企画テーマを設定するまでの工程に授業の大部分を要しているのは、「何をすべきか」「何故それをすべきなのか」という存在証明の部分を、先に述べた「社会的コンテキストの可視化」と重ね議論し、検討することに最も時間を使うためである。このような意味で、本授業は、今現在大学教育の中で実践の積み重ねが豊富なPBL型の授業（Project Based Learning、Problem Based Learning）とも若干異なる側面を持っている。すなわち、本授業では個々人の関心を言葉に落としながら、他者と議論を行い、精緻な企画課題をせり出すまでのプロセスに重きを置いているため、取り組むべきテーマそのものに関して、教員の方では、意識的に輪郭を持たせないようにしている。

一方で、ミーティングや対話・議論の進め方、ICTツールの使い方（情報共有のマナーや方法）に関しては、教員が授業内で解説を行い一定のルールに従ってもらうようにしている。その内容は電子ブックに記載されており、学生は貸与されたiPadに電子ブックコンテンツをダウンロードし事前に関連して読む。電子ブック内には、「ミーティングの方法」や「ICTを使った情報共有の方法」だけではなく、事例として過去にお茶大生によって出された企画スライド（アニメーション入り）、ブレインストーミングの動画、多数のポップアップ素材を入れ込んでおり、紙の読み物ではレビューすることが難しい情報が多数掲載されている。以下は近日公開予定のハンドブックの目次である。

序章：授業の基本方針

チャプタ1：ツールを使いこなす

    セクション1：iPad

    セクション2：ActivBoard

    セクション3：CMS (Content Management System)

チャプタ2：ミーティング

- セクション4：ミーティングの意味
- セクション5：共通点と相違点の確認
- セクション6：議論の切り口
- セクション7：発散型のミーティング
- チャプタ3：アイデアを作業に落とす
- セクション8：スケルトン
- セクション9：タスクリスト
- チャプタ4：プレゼンスライド作成のポイント
- セクション10：プレゼンテーションのエッセンス
- セクション11：スライド作成の注意事項
- セクション12：効率よくデスクリサーチを進めるために

学生は、企画テーマ（課題）の設定に至るまでの議論や思考プロセスをできる限り詳細に書き出し、表現するために、iPad、ActivBoard（電子黒板）、Plone（オープンソースのContent Management System）などのICTツールを使っている。電子ブック内のチャプタ1には、それらのICTツールが持つ特徴と応用の可能性が掲載されている。チャプタ2は対面式のミーティングについての解説である。特に学術的な議論と仕事におけるミーティングとの違いを意識し、主に後者を授業で実践してもらうような構成にしている。チャプタ3では、課題設定に至った経緯を第三者が聞いても理解しやすいストーリーに落とし込む基本的な方法と、その途中で発生する作業のリストアップ方法（タスクリスト）について記述している。タスクリストは、「誰がいつまでにどの程度の精度まで作業を行ってくる必要があるのか」という「取り決めの作り方」を解説したものである。この部分に関しては、苦手意識を持つ学生が多く、これまでに協働に躓くグループもしばしば見受けられたため、作業内容を鮮明にイメージしてもらえよう事例解説形式で記述した。

学生にはチャプタ3までを事前に読んできてもらい、授業内各実践の参考にしてもらっている（チャプタ4以降は参考資料としている）。また、アイスブレイキングの意味も兼ねて、口頭で電子ブック各セクションのパラフレージングを授業最初の10分程度を使い行っている。パラフレージングはiPadアプリの「プレゼンタイマー」を使いながら、約2分程度で行ってもらうようにしており、それに対する他の学生による質問や補足コメント、および、教員のフィードバックをiPadのメモつき録音アプリの「Audio Note」を使い授業内で即時共有している。

「電子コンテンツに目を通し、その内容を授業内で実践してもらうという」という流れは、今広まりつつある反転型授業の一種とも言えるかもしれないが、事前に動画授業や電子素材を視聴し、授業でその内容に対する理解度を確認したり、議論を行ったりすることが中心的な活動ではない。そのため、現在日本で行われている典型的なタイプの反転授業とは言えないことを補足しておく。

次に、本授業のゴールとして設定している「企画テーマ立案（課題設定）」までの手順について記述する。

### Work1

まず、学生はiCardSortというiPadアプリケーションを使い、興味関心があるテーマ（現代社会における様々な課題）にまつわる言葉をカード形式で提出する。以下は、学生が提出したiCardSortの例である（Figure2）。

初年度（2011年度）は、教員が学生に「興味関心があるテーマの〈キーワード〉をできるだけ出してください」と依頼したが、〈キーワード〉という言葉に引っ張られたためか、学生が作成してきたiCardSortのカード数を見ると思いのほか少なく、例えば「南北問題」や、「経済格差」などといった大きくくりに集約されてしまう傾向にあった。そのため、次の年からは、興味関心があるテーマにまつわる言葉をどのような形式（品詞のみでもその組合せ）でもよいので、50個程度出してもらうよう、大凡の数を指定した。挙げたカードは、色分けをしたり、グループ化をしたりして、それぞれの関連を意識し、さらにそのカードに出てきた言葉（5-10個程度）を使っ

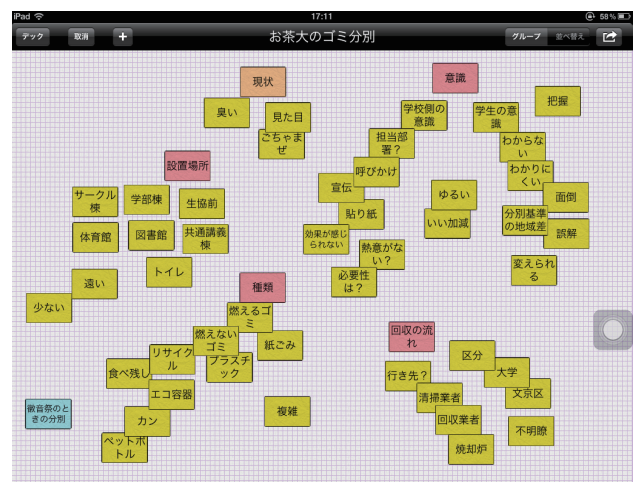


Figure2：お茶大のゴミ分別問題をテーマにした icardsort

作者: 石田千晃 — 最終変更 2012年11月07日 01時11分 — 履歴

### SNSは有用性があるか

最終変更 2012年11月06日 14時31分

もっと読む

### 日本人の娯楽

最終変更 2012年11月06日 22時52分

もっと読む

### 電車内のマナー向上

最終変更 2012年11月05日 22時34分

もっと読む

### 自殺を少なくするにはどうすればいいか。

最終変更 2012年11月06日 00時07分

もっと読む

### 就職難について

最終変更 2012年11月06日 11時05分

もっと読む

### いじめを撲滅するには



Figure3 : Plone に提出された icardsort の画像と説明文の一覧

て、何故そのテーマに興味があるのかという理由付けを800字以内（A4用紙1枚程度）で記述してもらうようにした。Figure3はオンライン学修支援システムとして使用しているPloneを介して学生が提出したiCardSortの一覧である。Ploneを介して履修者は他の学生のiCardSortと説明文を閲覧でき、コメントを書くことができる。

筆者は、提出されたiCardSortの内容と文章に対して、論理的にわかりにくい箇所や広がり期待できそうな点（課題に発展しそうな部分）をなるべく詳細にコメントし、次の回までに学生にフィードバックを行った。例えば、序で記した問題意識に重ねて述べれば「学生にできるのはこの程度である」といった「文脈に縛られている状況」に対しては、新たな間接的な繋がりをもてるような視点の提示をしたり、危なげない事実ベースの議論で終わらせようとしている学生に対しては、「その事実に対して自分はどうしたいのか」というオルタナティブを捻出してもらうような助成を行った。

Work1には2つの目的がある。まず第1は、関心があるテーマにまつわる「ことば」を具体的な形式で沢山想起し、それらの関連性を文章化するトレーニングの目的である。第2は、誰もが企画テーマの起案者として参与する可能性があることを示す目的である。最終的にグループのテーマは1つに絞られるが、この時点で「自分自身が何に興味関心があるのかがわ

からないと思っている学生」が、「問題意識がある程度はつきりしている学生」の論点に乗っかるだけになるのを避ける意味合いもWork1にはある。この時点で参加意欲が低い学生は、概してその後の企画テーマ設定の議論や情報収集に対しても消極的になる傾向がある。これらの潜在性がある程度回避するために、どの学生にも興味関心があるテーマを自分の言葉で語る機会があることをWork1で示している。筆者は最初の個々人のアウトプットを基に、ある程度関連性が見込めるテーマの学生同士を最初のディスカッショングループとして設定し、学生はそのグループで最初の口頭説明と質疑応答を実施する。質疑応答の実施前に、各自が作成したiCardSortは、Wi-Fi機能を使い複数の学生と教室内で即時共有している。

### Work2以降の活動

Work1の質疑応答の後、学生は最初に作成したiCardSortの言葉を、下記のフレームワーク(Figure4)を参考に（経営大学院, 2001）配置しなおしたり編集しなおしたりして、自分の考えを再整理する(Work2)。フレームワーク(Figure4)は、大凡「クリティカルシンキング(グロービス経営大学院, 2001)」を参照した流れになっている。Work2は、類似性、関連性がある問題意識を持った学生同士の議論を無難な世間話だけに終らせず、共通点と相違点を一定の規準に沿って相互に確認するための準備である。Work2のアウトプットを基に、学生は、再度説明と質疑応答をグループで行う。以下はPCソフトを使って学生が提出したWork2の図である(Figure5、Figure6)。

第一段階の「1. イシュー特定」は、学生各人が「問題である」と感じている社会的な事象と理想のあるべき姿との差異を意識してもらう段階である。「2. 問題の特定」は、「1. イシュー」としての大きな言葉にくくられているものを因数分解しながら、イシューを引き起こしているあらゆる要因を洗い出していく段階である(Work3)。このWork3の作業を通じて、各自

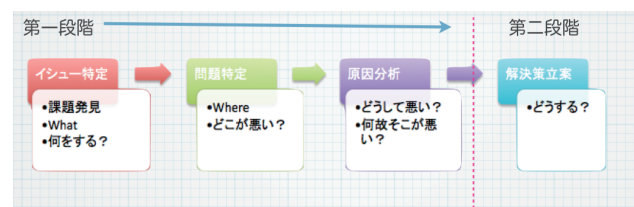


Figure4 : フレームワークの参照例

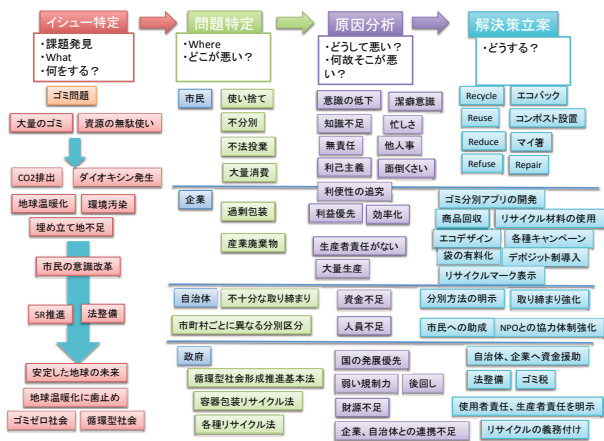


Figure5 : work2 の例 1

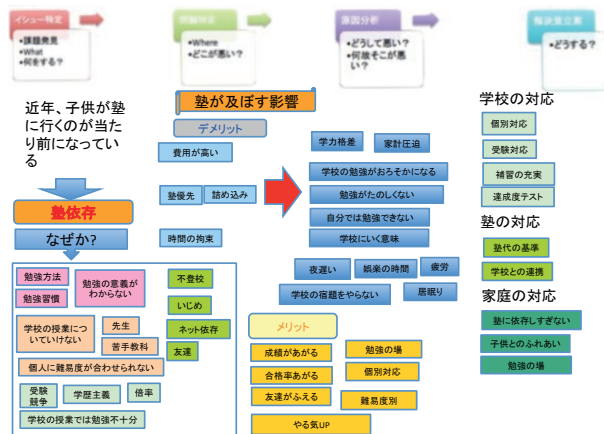


Figure6 : work2 の例 2

の共通点と相違点をより鮮明に意識してもらうようにしている。このとき、要因分析や整理分類の方法として、MECE やロジックツリーといった方法論や、一般的にビジネスで使われる事が多い切り口をいくつか紹介している(電子ブック内、チャプタ2)。ここでは、学生がフレームワークに基づくタクソノミーにのめり込みすぎて本来の目的である企画課題の設定作業から大きく脱線してしまわないよう教員は慎重に介入している。次の「3. 原因分析」も「2. 問題の特定」と同様に進め、両作業により因数分解された各項目の中で最も優先順位が高そうな部分を議論により暫定的に特定してもらっている (Work4)。これらの一連の作業を通じて、第二段階の「4. 企画提案」に繋がるイメージを徐々に浮き彫りにして行く。大凡、「1.」～「3.」までの議論に収束が見られ、「4. 企画提案」の骨格がみえる段階に至ったら、具体的な企画活動案を捻出する発散型ミーティングを行う (Work5)。その際、必要に応じて先行活動事例をリサーチしてもらい、先行

活動事例のどの部分をどれくらい自分達の企画は乗り越えようとしているのかを示してもらっている。

ICT ツールの活用

Work2 以降の教室内対話や議論には、ActivBoard (電子黒板) や iPad の BaiBoard (匿名で手書きデータの即時共有が可能なアプリ) を使っている。ActivBoard を使う最初の段階ではブレインストーミング時の書き込みスピードを体感してもらうため — いわゆる学校の「板書」とは異なる — 教員が ActivBoard に書き込みを行いながら、議論のファシリテーターも行っているが、回数を重ねていくに従って学生が ActivBoard に記入をしながら議論を行うようになっていく。ActivBoard の議論の過程は動画として記録することができ、学生は動画を Plone を使いブラウザ上で再生させたり iPad にダウンロードしてレビューすることができる (いずれも早回しが可能)。

議論を深めるにあたって必要な情報は、オンラインツールの Plone を使い共有している。Plone は、オープンソースの Content Management System の 1 つで、本学では Plone を学修支援システムとして活用している。Plone は、インターネット上にある情報リソース (URL リンク) や作成したプレゼンファイルの共有ツールとしてだけでなく、授業中、即時的に自分の考えを口頭表現することができなかった学生が、後からでも疑問に思ったことや納得がいかなかったことを言語化 (可視化) し、投稿するツールとして利用している。これには、オフラインのグループワークの際、口頭表現に長けた 1 人 (もしくは少数) の学生に議論を引っ張られてしまうことで、多様な意見・異見

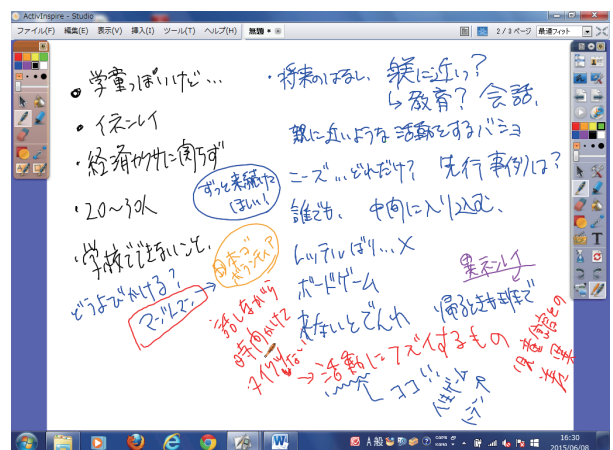


Figure7 : 学生によるアクティブボードの活用例



Figure8：学生からのPloneへの投稿に教員がハイライトや赤字でコメントをしている例

が十分に吟味されることなく、様々なフェーズにおける意思決定がなされることを回避する意味合いがある。実際にオフラインの授業時間よりも、Ploneを介したオンラインディスカッションの方で活発に意見を言う学生もいる。Figure8は、Ploneに投稿された学生の報告に対して教員が赤字等を使いコメントを挿入した画面である。また、Figure9は、Ploneを使い学生同士が掲示板形式でディスカッションを行っている様子である。上記のようにオフラインとオンラインにおける様々なICTツールを活用しながら課題の焦点を徐々に絞っていくが、最終的な課題の設定に至るまで大凡7回から8回の授業回数を必要としている。

#### 他者との対話と合意形成までの困難性

教員はWork1、Work2で学生側から提示されたアウトプットの内容を考慮しグループを構成しており、その時点で特に学部学科のばらつきは考慮していない\*1。例えば、2013年度の企画「理科を好きになってもらおう（小中学生を対象とした企画）」のグループメンバー（Table1）は、企画名だけを見ると、自然科学系の学生に偏りそうなイメージを持たれるかもしれないが、実際には様々な学部学科の学生が参加した。

異なる学習・学修を行っている人間同士が「何をすべきか」ということから「何故そのテーマに取り組むのか」という理由付けに至るまで議論を重ねながら1つ1つコンセンサスを取っていくことは容易ではなく、合意形成に至るまでに様々な紆余曲折を経る



Figure9：Plone上における学生同士の意見交換の様子

ループがほとんどで、多くの学生が「大変である」という感想を持つようである（後述の「授業アンケート自由回答」を参照されたい）。議論の途中で、自分の本意ではないテーマに取束しそうになると、取り組みに対するモチベーションを保つことが困難になり、履修を取り消してしまう学生もこれまでにいた。しかし仕事の世界では、様々な人間の思惑が交差し、自分の意見が100%純粋な形で取り入れられることの方が珍しい。仮企画テーマが決まった後は、各人がそれぞれに活躍できそうなタスクを見つけ、自分が貢献ができる「関わり方」を考えてもらうようにしている。その際にも、教員はWork1とWork2で提出された言葉のカードと説明文書内の情報を手がかりに、関連性を意識的にピックアップし介入するようにしている。

Table1: 企画テーマ「理科を好きになってもらおう」グループのメンバー学部学科内訳

学生1	理学部 物理学科	(1年)
学生2	文教育学部 人文科学科	(1年)
学生3	理学部 化学科	(1年)
学生4	文教育学部 芸術・表現行動学科	(1年)
学生5	理学部 情報科学科	(1年)
学生6	生活科学部 人間生活学科	(3年)
学生7	生活科学部 人間生活学科	(3年)

プレゼン slides の添削、最終発表、総評

以上のようなプロセスを経て、企画テーマの課題設定がなされた後、授業の終盤1ヶ月程度をかけて、最終のプレゼンテーションスライドを作成していく。しかし、企画テーマの設定にたどりつくまでの対話と議論に、学生はかなりの労力を費やしており、「取り組むべきテーマがなかなか決まらないこと」への苛立ちや焦りで、精神的に疲弊していることが多い。加えて、パワーポイントやKeynoteの使い方に習熟していない学生も多いため、最終プレゼンテーションのスライドは、企画提案の大凡の流れが把握できる簡易なものを作成してもらうことに止めている。簡易スライドを作成後、教員からの1回～2回フィードバックを行うが、最終バージョンのスライドには教員が手を加え完成させ、プレゼンテーションスライドの作り方を間接的に学んでもらっている（最初から最後まで学生のみでスライドを作成するグループも数は少ないが存在する）。

授業の最終回までに企画のスライドを完成させることができたグループには、第三者（本学関係者、企業・団体の方）にゲストとしてプレゼンテーションを聴きに来てもらい、可能な限り外部にも授業を開くようにしている。また、最終発表後、教員は、グループごとに総評（A4用紙1枚程度）を作成しPloneに掲載している\*2。総評は、どのような流れで議論が進行していったのか、最初の着想部分から、課題設定に至った経緯を記述し、議論にどのような意義があったのかをまとめている。以上が、授業の大まかな流れである。

これまでの成果

次に実際に本授業で企画され、本学で実現に至ったテーマを紹介したい。本授業を通じて2013年度末までに出された企画は、通算16件あり、うち、学内の第三者を巻き込んでプロジェクトが実施されたケースは、以下の3件であった（Table2）。Table2に示したように以下の3プロジェクトのいずれもが、本授業で企画テーマ設定を行ってから1年程度の時間をかけて活動を実現させている。本授業で教員が助成しているのは、あくまでも企画の存在証明にまつわる部分であるため、さらに精緻に計画し実行に移すためには、本授業受講後に相応の時間が必要であることが窺える。

Table2内「ゴミ箱表示改善プロジェクト」は、2013年冬に授業で企画テーマを設定し、約1年後の

Table2: 本学内で企画を実現させた事例

企画名 授業実施時期 企画実施時期	実施形態 連携先 活動補助金の有無	企画の概要
「リカレント教育から学ぶ」シンポジウム 2011年前期 2012年前期	授業「お茶の水女子大学論」の1回分でシンポジウムを開催。 連携先：キャリア支援センター、リーダーシップ養成育成センター、学内教員（生涯学習論の視点からのアドバイス補助金なし）	大学卒業後、就職し、その後また大学に戻り、再就職する、といったようなリカレント教育の実践者が大学における学びをいかに位置づけているのかを知ることで学部学生が学修の示唆を得る。
国際交流活性化プロジェクト 2011年後期 2012年後期	お茶大内にいる留学生との交流イベントを数回実施 連携先：グローバル協力センター 補助金あり	お茶大内にいる留学生と知り合う機会が少ないため、気軽に継続的に参加できるイベントを行い、交流のきっかけを作る。（既に学内で行われている活動との棲み分けを明示し補助金を得た。）
ゴミ箱表示改善プロジェクト 2013年後期 2014年後期	お茶大内のゴミ箱表示シールを作成し全学的に変更 連携先：リーダーシップ養成育成センター 補助金あり	学内のゴミ問題を引き起こしている根源に様々な調査を通じてアプローチした。学内のゴミ箱表示の統一を提案し、新しいゴミ箱表示シールを制作した。これにより、日常学内清掃業務の効率を上げ、コストを下げることを目論んだ。

2014年冬に企画を実現させた。この企画は、学内ゴミ箱表示を統一し環境にやさしい大学作りの推進を目的に立案されたものである。このグループでは、授業期間中、iPadを用いたインタビュー、Ploneのウェブアンケート等、ICTツールを使った情報収集と共有、ならびにそれらに対する議論が、授業内（オフライン）／授業外（オンライン）の両方で活発に行われ、企画の存在意義を証明するまでのストーリーが非常に精緻に編まれていった。特に、オンラインコミュニケーションツールであるPloneを利用した意見の可視化がプロジェクト実現への大きな補助となったことが窺える。Table3は、2013年度履修生による4つの企画でPloneに投稿されたコンテンツの数を比較した表である。いずれの企画も力作であったが「ゴミ箱表示改善プロジェクト」が突出してオンライン議論の数が多いことが分かる。

「ゴミ箱表示改善プロジェクト」は、授業のグループ分けの時点で15名の学生がいたが、最終発表まで残ったのは10名で、授業後の学生自主企画に挑戦したのは、6名であった。学生自主企画は、本学リーダーシップ養成育成センターが募集しているもので、採用された場合、一定額の資金援助を受けることができる（リーダーシップ養成育成センターHP, 2015年3月

Table3: 2013年前期と後期の授業で取り組まれた4つの企画グループがPloneに投稿したコンテンツ数の比較表

	企画タイトル	「ながら歩き改善」Lineと連携したポスター制作企画	「格差をあきらめない」大学受験生がある高校生のための情報サイト	「ゴミ箱表示改善プロジェクト」ゴミ分別を促進するデザイン企画	「お茶大災害コミュニティポータル」
投稿コンテンツの種類と数	コメント(掲示板)	43	86	237	85
	ファイル	22	32	43	24
	フォルダ	2	4	7	2
	ページ	11	7	16	5
	リンク	1	4	2	16
	画像	6	4	17	0
	合計	85	137	322	132



16日閲覧)。「ゴミ箱表示改善プロジェクト」の継続メンバー6名は、2013年10月から実施した授業から約1年後に、リーダーシップ養成育成センターの資金援助を得て、学内の新しいゴミ箱表示シールを制作し張り替え作業を行った (Figure10)。本プロジェクトは、高いレベルで仕事を遂行した Good Practice の1つと言えよう。

### 授業アンケートの自由回答

最後に、2012年度と2013年度に「情報コミュニケーション技術と創発性」を受講した学生を対象に実施した授業アンケートの自由回答を紹介したい。ウェブアンケートは、2015年1月22日から1月29日までの間に行った。受講した学生は65名であったが、うち11名は卒業したため、54名を対象とし、26名から回答があった。アンケートはPloneを使って作成し、学内統合認証を経てログインができる環境を用いて行ったが、結果は匿名になるよう処理を行った\*3。

以下は、全自由回答の一覧である。

- ・iPadの使用は初めてでしたが丁寧に教えていただき勉強になりました。集まった学生のみなさんは学年、学科が様々でとても楽しかったです。

Figure10:「ゴミ箱表示改善プロジェクト」学内シール張り替えボランティア募集ポスター

## ボランティア大募集!

お茶大の「新しいごみ箱表示」を一緒に貼りませんか?

**日時: 10月17日(金) 12:30~15:00**  
※昼休みだけ、5/6限だけの参加も大歓迎!

**場所:** 構内各所(集合場所の詳細は後日連絡)

**内容:** お茶大構内のごみ箱に、**より分別方法の分かりやすい、新しい表示**を貼り付けます!

お茶大の分別方法、どうなってるの?と思ったことのある方ぜひ!



参加者にはささやかなお礼を差し上げます★



協力していただけるとはごらまでご連絡下さい。  
★QRコードを読み取るとメールが送れます→

【連絡先】3年 藤井裕子  
g1210435@edu.cc.ocha.ac.jp

7月23日~8月4日に行った投票へのご協力ありがとうございました。73対16で、このデザインに決定致しました!

●「ごみ箱表示改善プロジェクト」について

「ごみ箱表示改善プロジェクト」チームは、お茶大構内にあるごみ箱の分別表示の明確化、および分別意識の向上を目指して活動しています。本プロジェクトは、文部科学省特別経費「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」事業の、「平成26年度学生自主企画プロジェクト」に採用されたものです。

- ・とても実用的で、学生が主体的に動くことのできる授業で履修して良かったと思っています。あの時もう少し真剣に、深く考えていればより内容を活かせたかと思っています。一つのプロジェクトを立ち上げる上でマストなことは何かを教えていただけると良かったです。
- ・iPadが貸与されるという点に惹かれて軽い気持ちで受講しましたが、実際に取り組む内容は結構高度というか頭を使うことが多くて、悪戦苦闘することもありました。私は2年次に履修しましたが、内容的に就職活動にいかされそうなことが多かったので、3年次に履修すればよかったなと後になって思います。
- ・グループワークによる企画は、もっと時間をかけて行えばよかったと思う。実際に案を実現させるには、ツテがなかったので難しいところがあった。ツールの使い方はなんとなくわかったが、「このツールでは〇〇するのがいい」という使い方を学ぶことはできなかったように思う。
- ・実際にアイデア出しから企画を立てる段階まで行うことはこれから社会に出て通用する能力であり、このようなことを大学で学べるのは非常に貴重であると思います。他の授業と比べてかなり負担は重く感じましたが、その分得られるものも大きかったです。とても価値のある授業でした。ただ、どうしても積極的にやる学生とやらない学生が出てきてしまい、負担にばらつきが出てしまうことが少し残念でした。私はICTと創発性で企画した内容を実現しましたが、実際に企画をしたものが実現する喜びも感じる事ができました。
- ・他学年、他学科の人とグループを作り活動を行ったことで多様な方向からの考えが出て勉強になった。
- ・グループワークで自分の意見を発言したりする経験ができた、また様々な人の意見の集約が難しいことが分かった。ICTの活用について知識がほぼなかったので勉強になった。
- ・お茶大ではなかなか受けることができないプレゼンの方法や企画の考え方などについて学ぶことができてとても楽しく有意義でした。
- ・ひとつのテーマについて、時間をかけて深く掘り下げて考える、良い機会になった。だが、企画を実現しにくいテーマを選んでしまった場合、また、候補にあがった企画に興味をひくものがなかった場合は、モチベーションを保つのが難しい。大きすぎる題材ではなく、現実味のあるものを扱っていたら、よりよい経験になったと思う。
- ・自分のしたいことを、具体的に進めていく方法を、楽しみながら学べた。一人一人が活躍できることを意外なほど、実感できた。

- ・とても興味深い内容でした。来春から社会人になりますが、コミュニケーションツールをいかに効果的に使うかということを学ぶことができたので、それを活かしていきたいと思います
- ・グループで企画を考えていくうえで、密に連絡を取り合う必要があり、ICTを利用した活動の中でも大事なものは人とのつながりだということを学べた。
- ・学部学科が異なる人達とのグループワークは、大変だった分学ぶことも多く、履修して良かったと思いました。またタブレットを貸与していただいたことで、授業時間以外にも作業に取り組み活動が濃い内容になり楽しく活動できました。
- ・タブレットを使って企画を考える、新しい授業だと思ったが、周りのメンバーの中には予定通り進められない人もいたため、そこが残念だった。
- ・普段億劫になってしまっているような内容だったのですが、iPadの使い方を丁寧に教えてもらえるだけでなく、グループワークなどの支援などもしっかりしてもらえて、受講してよかったと思うし、少し勇気が持てるようになりました。
- ・アットホームな雰囲気です。最初友人がいなかったにも関わらず楽しく受講できましたし、わずかですがもともと自信のなかった自らの積極性、発言力、プレゼン力を高めることができたと思います。
- ・なかなかないプレゼンの機会を得られてよかった。
- ・他学科他学年の人たちと濃いグループワークをすることは、たいへん刺激があった。ふだん知り合えないような人と触れ合えたのはいい経験。
- ・話し合いはすごく難しかったが、とても有意義だった。iPadも使えて充実していた。
- ・iPadを使うのは初めてだったので、基本的な使い方から、企画立案に必要なものまで幅広く学ぶことができ、その後の大学生活にも役にたっています。
- ・企画立案の過程を体験できたのがほかの授業ではできないことなので新鮮でした。最後のプレゼンはすごく緊張しましたが何とか成功して達成感を感じたのを覚えています。
- ・私は学部の特性上、プレゼンのような発表を行ったり問題意識を持って何かの話題について議論するという機会が少なく、実際に人に何かを発表する経験をしたことがあまりありませんでした。この授業を通してICTに関する理解を深めることができたのはもちろんですが、ひとつの企画についてメンバーとアイデアを練り、聴衆にわかりやすく伝えるためにはどう工夫を加えていけばよいか試行錯誤ができたことが非常に有意義な経験でした。これから社会で活躍していくための準備にもなっただろうと感じています。
- ・とても大変な授業でしたが、私は受講してよかったと

思っています。授業で出会った先輩との新たなつながりをつくることができましたし、計画したものを実現するという貴重な体験ができました。計画したものが実現する喜びも学びました。

- ・最初はわからないことだらけで辛いことが多かったですが、発表の形に持っていくことができ達成感であふれました。全く知らない人とグループだったので連携を取るのは大変でしたが楽しかったです。

以上の感想からは、全体として「一授業としては大変である」というニュアンスのコメントが多く見受けられる。ICTツールの活用方法からミーティングの方法、アイデアをタスク（作業）に落とす方法まで、様々な要素を授業の中に入れていたため負担が多いのは確かで、物理的にやることの多さに加えて、学部学科を異にした学生同士でコンセンサスを得る精神的な大変さが相まって、学生に「大変である」と感じさせてしまっていることは否めない。アンケートの結果にあるように、専門分野の異なる学生同士が、学部生の授業としては比較的長期にわたり共同作業を行うため、たとえ最初の時点で類似の興味関心を持っていても、企画内容の細かい箇所や仕事の進め方で意見が合わず、グループワークが難航することも多々あった。これらを今後の課題とするならば授業として行う範囲を幾分縮小してもよいのかもしれない。

しかし、企画テーマにまつわる意見の相違や仕事の進め方の相違を解消していくために他者とする対話や議論が「コンテキスト」に隠されている情報を1つ1つ外化する作業に他ならない。この作業の中にこそ「日頃の文脈によって全面的に食い尽くされている状況を一旦離れ、相対化するために外と繋がる力を持つ（バーンステイン、2000）」きっかけが包含されているのではないかと筆者は考えている。現在の情報化社会を規定しているコンテキストは、「隠蔽され、中立的な手続きの中に織り込まれ、拡大していくメディア市場の大量消費パタンとして結晶化され、記号の一連のセットに変身（メルッチ、1997）」しているというが、もしそうであるとしたら尚のこと、事件や問題が自分の身にふりかかって初めて効力を発揮するような学習だけではなく、綿々と続く日常業務に付随しつつ一連のセットとして立ち現れるコンテキストの有り様を解きほぐしていくリテラシーを学生の間につける必要があるのではないだろうか。

#### 付記

授業を受講して下さった学生の皆様と本報告への掲

載許可をくださった「ゴミ箱表示改善プロジェクト」の学生の皆様、学生自主企画を支援してくださった本学リーダーシップ養成教育センター（現グローバルリーダーシップ研究所）の先生方にこの場を借りて御礼申し上げます。また「ゴミ箱表示改善プロジェクト」の発表にコメンテーターとして起こしいただいたNHKラジオ放送局の福田寛之さんにもこの場を借りて御礼申し上げます。

#### 注

- \*1. この方法で現在の所、際立った学部学科の偏りは出ていないが今後は特定の学部学科が偏ることなくグループ編成がなされているかどうかにも目を配る必要があると考えている。
- \*2. Plone の授業サイトは4年間、受講した学生に公開されており、在学中はいつでも過去に学習・学修した内容を振り返ることができるようになっている。
- \*3. Plone Survey という Plone のアドオンプロダクトでは、Confidential チェックボックスにチェックを入れると各回答結果レコードの行頭（回答者名）が Anonymous の文字に変換される。

#### 参考文献

Alberto Melucci(1989)Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society, Temple University Press.  
山之内靖, 貴堂嘉之, 宮崎かすみ (1997) 『現代に生きる遊牧民 (ノマド) -新しい公共空間の創出にむけて』 岩波書店.  
Basil Bernstein(1996) Pedagogy, Symbolic Control and Identity, London & Bristol: Taylor & Francis.  
久富善之, 山崎鎮親, 小澤浩明, 長谷川裕, 小玉重夫 (2000) 『〈教育〉の社会学理論 -象徴統制、<教育>の言説、アイデンティティ』 法政大学出版局.

グロービス経営大学院 (2001) 「MBA クリティカル・シンキング」ダイヤモンド社.

本田由紀 (2009) 「教育の職業的意義 -若者、学校、社会をつなぐ」 筑摩書房.

石田千晃 (2012) 「2011 年開講科目「情報コミュニケーション技術と創発性」の実践報告」『高等教育と学生支援』2, 81-84.

松下佳代 (2010) 〈新しい能力〉概念と教育—その背景と系譜」松下佳代編著『〈新しい能力〉は教育を変えるか 学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房.

溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂.

#### その他参照資料

文部科学省 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」 [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf), 2015 年 3 月 16 日閲覧.

お茶の水女子大学「学生・キャリア支援センター HP」 [http://www-w.cf.ocha.ac.jp/career\\_edu](http://www-w.cf.ocha.ac.jp/career_edu), 2015 年 3 月 16 日閲覧.

お茶の水女子大学「リーダーシップ養成育成センター HP」 <http://www-w.cf.ocha.ac.jp/leader/education/kikaku/>, 2015 年 3 月 16 日閲覧.

2015 年 3 月 24 日 受稿

2015 年 8 月 31 日 受理